

Thackeray と Bulwer-Lytton

白 田 昭

往時ロンドンの紙価を高からしめていた Bulwer-Lytton も、今では Victoria 朝の minor novelists の一人として、その地位は否定的な意味で安定しつつあると言えるだろう。Bulwer (以下簡略を旨として、こう呼ぶことにする) の当時の人気については、いろいろ多くの証言もあるが、その中でも D. N. B. の記事は注目に値する。すなわち、書肆 Routledge は、もうすでに何種類か Bulwer の collected edition が出版された後の1853年に、以後10年間の廉価版の著作権料として、二万ポンドを Bulwer に支払い、さらに五千ポンドで五年間の期限延長の契約を二度にわたり結んでいるのである。ことほどさように Bulwer の小説はよく売れ、よく読まれたものと思われる。しかしこの大衆的人気とはうらはらに、Bulwer は批評家や有識者からは、たえずうさん臭い目で眺められていたことも事実のようであり、後世の史家が Bulwer を評するにもってする、‘a favourite whipping-boy of the Victorian critics’⁽¹⁾ とか、‘Dr. Fell of a large part of the literary world’⁽²⁾ といった言葉は、このあたりの事情を言うものである。そしてその原因は、Bulwer のダンディ振ったポーズや、あまりに多彩な才能が、ややもすると軽佻浅薄の印象を与えがちだったところにあると考えるのが妥当なようである。Bulwer の人気が高まるにつれて、多くの雑誌や新聞は、その批評の砲火を彼に集中しはじめ、その中でも *Fraser's Magazine* の Bulwer 攻撃はすさまじかった。*The Newgate Novels 1830—1847* の著者 K. Hollingsworth は、*Fraser's Magazine* の Bulwer 攻撃の理由を、主筆 William Maginn の Bulwer に対する私憤と考えている。⁽³⁾ その事情はこうである。Bulwer は *Paul Clifford* の中で、Macgrawler という滑稽な人物を描き出している。この Macgrawler は、作中では *Asinaeum* という無名の雑誌の編集長で、主人公 Paul が養われていたロンドンの安酒屋の常連ということになっている。Macgrawler は自分の飲み代のかたに、幼い Paul の家庭教師役を引き受ける。やがて Paul は Macgrawler から、文芸批評の要領三項目 ‘to tickle, to slash and to plaster’ (すなわち、当たらずさわらずの批評と、くそみその酷評と、べた賞め) を伝授され、Macgrawler の代筆を出藍のほまれをもって勤めるのだが、Macgrawler は平然とその原稿料の上前をはねる。やがて Macgrawler は尾羽うち枯らして、編集者から掏摸になり下がり、路頭に迷っているところを Paul Clifford に拾われ、Paul とその配下の山賊たちが根城にしている秘密の洞窟の料理番に雇われるが、おたずね者の Paul の首にかけ

(1) Richard Stang; *The Theory of the Novel, 1850—1870*. p. 76

(2) Gordon N. Ray; *Thackeray, The Uses of Adversity, 1811—1846*. p. 243

(3) Keith Hollingsworth; *The Newgate Novel, 1830—1847*. pp. 78—80

られた賞金に目がくらみ、洞窟のありかを密告して、恩人の Paul を官憲に売り渡すのである。このように Macgrawler は徹底的に愚物として、また人の風上にもおけぬ卑劣漢として描かれているが、Hollingsworth はこの Macgrawler が、後の *Fraser's Magazine* 主筆の Maginn を当て込んだものと推定するのである。この推定を裏書きするのは、ただ Maginn が酒好きであったということばかりではない。当時 Maginn の関係した雑誌の一つに、有名人の私生活の暴露記事で悪名高かった Age というのがあり、その経営者 C. M. Westmacott は居酒屋の女将を母としていた⁽⁴⁾という事実も存在する。ついでながら言うと、Maginn が飲酒放逸の末、1842年に窮死したあと、Bulwer は旧敵追善のためか、1853年の *My Novel* において、文才ある少年の文章道の手びきをする酒呑みのジャーナリスト Burley という人物を好意的に描いているのも、上の Maginn-Macgrawler 説に符合することと言えるだろう。この Maginn と Bulwer の喧嘩は二人のどちらが先に売ったものか、その点はどうとも言えないが、*Fraser's Magazine* の発刊を企画したときの Maginn は、この雑誌の特色の一つとして、当時の出版界の有力者 Colburn とそのドル箱である fashionable novels の攻撃を考え、その代表選手とも言うべき Bulwer を槍玉にあげたのである。かくのごとく、Maginn と Bulwer は犬猿の間柄だった。そして *Fraser's Magazine* の呼び物記事の一つに 'Gallery of Literary Portraits' というのがあり、これは画家 Maclise の筆になる当時の作家連のスケッチに、Maginn が辛辣な人物評を書き加えたものなのだが、もちろん Bulwer もこの選に洩れなかった。そしてまた同誌に掲載された *Elizabeth Brownrigge ; a tale* も Bulwer 作の *Eugene Aram* のパロディであり、Lockhart の助けを借りた Maginn の筆になるものと考えられている。この Maginn の後を受けて、*Fraser's Magazine* の Bulwer 攻撃を続けたのが Thackeray である。Thackeray が Maginn を知ったのは、その日記の記事よりして、1832年4月16日⁽⁵⁾のことと分かる。当時の Thackeray は親ゆずりの遺産を資本に新聞発行を目録んでおり、Maginn と知り合ったのも、新聞事業についての実地の知識を伝授してもらうためだった。Thackeray はすぐに Maginn の 'wit and good feeling' に魅せられ、二人の親交はその後かなり続き、Maginn は *Pendennis* 中の Captain Shandon として、その面影を止どめるに至るのである。十八才も年上で、いつも金に困っていた酒好きの Maginn には、世間知らずで金離れのよい二十一才の若僧 Thackeray は、あるいはよい鴨と見たのかもかもしれない。ともかく Maginn は、初対面以後三日にあげず Thackeray と会食しては酒を飲み交わし、共に賭博場を訪れ⁽⁶⁾、ときにはもっといかがわしい場所へ Thackeray を案内したあげく⁽⁷⁾、ついには Thackeray の新聞発行に協力する支度金と称して、500ポンドの金をまき上げるなど⁽⁸⁾、放

(4) Malcolm Elwin ; *Victorian Wallflowers*. p. 105

(5) *Letters and Private Papers of W. M. Thackeray*. vol. I, p. 191

(6) *ibid.*, p. 200

(7) *ibid.*, p. 209

(8) *Letters* ; vol. IV, p. 252

蕩時代の Thackeray の取巻き連の一人になっていた。とはいえ、Thackeray の方でも決して鴨にされっぱなしだったわけではない。いかに酒びたりではあっても、Maginn はアイルランドでは前代未聞といわれる24才の若さで、Dublin の Trinity College から LL. D. の学位を得た逸材で、*Blackwood's Magazine* や *Literary Gazette* で鍛えられた辛辣な才筆をもって鳴る、当時のジャーナリズムの雄だった。Thackeray はこの Maginn から文芸批評のこつを教えられ、文章道の手ほどきを受け、吸収すべきものはすべて吸収していたのである。

思わず前置きが長くなってしまった。この小論の目的は Thackeray の Bulwer 批評の諸相を検討することであるから、Thackeray と Maginn の関係はこの辺で切り上げておかねばならない。ともかく Thackeray と Maginn は知り合った。そして遺産を蕩尽して、今や売文の道に糧を求めねばならなくなった Thackeray に、第一の登竜門 *Fraser's Magazine* の扉を開いて招き入れてくれたのが Maginn であった。肝胆相照らした間柄のこの二人には、気の合う点が多かったろうが、その中でも Bulwer 嫌いは決して最小のものではなかったことだろう。そして世にときめく文壇の寵児 Bulwer を肴に、心ゆくまでこれをこきおろしつつ、杯を傾けて夜更けに至ったのも、おそらく一度や二度のことではなかったろう。このような事情を考えてみると、*Fraser's Magazine* における Thackeray の Bulwer 批評が猛烈をきわめたことも、なんとなく理解できるように思われてくる。

しかし、もちろんなにも Thackeray がやたらと他人の尻馬に乗り、自らの確たる信念もなしに Bulwer を攻撃したというのではない。彼には彼なりの理由があったのである。ではなぜ Thackeray は Bulwer を嫌ったのか、まず第一に想像されるのは、この二人の間に何か個人的な怨恨でもあったのではないかということであり、第二に考えられるのは、無名作家が流行作家に対して抱きがちなねたみ、‘malignity of jealous failure’ がその動機だったということである。第一の点については、Thackeray の言葉がこれを否定している⁽⁹⁾。第二の点については、Bulwer の熱心な弁護者 Michael Sadleir が、その著 *Bulwer and His Wife* において、この立場をとっていたのだけれど、G. N. Ray 編纂の Thackeray 書翰集が1946年に出版されるに及んで、それまで知るよしもなかった Thackeray の人柄の intimate な面を窺知した Sadleir は、自分の所論の誤りだったことを告白し、Thackeray の Bulwer 批判は ‘genuine critical reaction’ だったと認めるに至ったということである⁽¹⁰⁾。しかし、この点についてはまだ考えてみなければならぬ面も残っているように思われる。というのは、‘genuine critical reaction’ というのは、disinterested なもので、相手に対する spite を含まないと考えるのが当然だろうが、Thackeray の Bulwer に対する批評は、個人的中傷の要素を含んだ、いさかかえげつないもので、どうも ‘genuine critical reaction’ という概念とはなじみ難い感じがするからである。

‘Each burns alike, who can, or cannot write,

(9) *Letters*; vol. II, p. 485

(10) Ray; p. 9 and p. 244

Or with a Rival's or an Eunach's spite'.

という Pope の一句を援用するなら、もちろん Bulwer に対して Thackeray が eunach ではないことは明らかで、彼の Bulwer 批判の動機に rival's spite に近いもの考えるのが自然なように思われるのである。

Thackeray の Bulwer 批評は1837年から38年にかけて、二度にわたって *Times* 紙上に掲載された *Earnest Maltravers* 及びその続篇 *Alice* の批評から始まる。前述の Hollingsworth の言葉によるならば、1837年から1840年にかけての Thackeray の *Fraser* 誌への寄稿の三分の一には、大なり小なり Bulwer をけなす言葉が含まれている⁽¹¹⁾。そしてこれら一連の批評の特色として言えるのは、Bulwer に対するどぎついほどの揶揄であり、1837年から38年にかけて *Fraser* 誌に連載された、いわゆる *Yellowplush Papers* がその代表的のものと言えるだろう。Yellowplush とは Thackeray 愛用の nom de plume の一つで、この作品は、Charles James Harrington Fitzroy Yellowplush という大仰な名前をもつ或る召使が、上流生活の実体をつぶさに目撃して、これを記録するという形になっており、流行の silver-fork school の小説を逆撫でにすることを狙ったものである。そしてこの戯作の末尾に *Yellowplush's Ajew* と銘打った一章があり、晩餐会の席上、Yellowplush が流行作家 Bullwig と対面するという建前で、Thackeray は Bulwer を嘲弄するのである。まず第一に Bulwer の名前が揶揄の対象となる。彼の名前はもともと Edward George Earl Lytton Bulwer という大仰なものだった上に、やがて母方の由緒ある家柄を相続したため、姓がいわゆる double-barrelled になり、もう一つ Lytton というのが付加されることになる。かてて加えて Bulwer が文学上の功績により baronet の称号を受けるに至ったことも、Thackeray の揶揄を更に誘ったのである。次に槍玉にあがるのが、Bulwer の世評に対する敏感さであり、第三に皮肉られるのは、Bulwer の言葉使いの大仰で空疎なこと、またその必要もないのに好んで古典を引用する銜学癖である。そしてこれら三つの項目は、今後も Thackeray の Bulwer 攻撃の定型となるのである。

このように *Yellowplush's Ajew* に見られる Thackeray の Bulwer 攻撃は、大半が揶揄であり、個人的中傷であって、批評というにはほど遠い。そしてその中でわずかに批評的意義をもつものは、Bulwer のいわゆる stilted style に対する批判のみと言ってよい。

Yellowplush Papers が一旦完結したあと、1840年に Thackeray はその追録という形で、*Epistles to the Literati* と題する一文を *Fraser's Magazine* に掲載した。これもまた例の Yellowplush が Bulwer 作の戯曲 *The Sea Captain* を批評するという形式のもので、Bulwer の名前や世評に対する敏感さなどについての揶揄は、一段と激しさを加えている。しかしその中で、Bulwer の長所は長所として認めようとする様子もないわけではない。

I've had my fling at you ; but I like you. One may object to an immense deal of your writings, which, betwixt you and me, contain more sham sentiment,

(11) Hollingsworth ; p. 150

sham morallaty, sham poatry, than you'd like to own; but, in spite of this, there's the stuff in you; you've a kind and loyal heart in you, Barnet—a trifle deboshed, perhaps; a kean i, igspecially for what's comic (as for your tragady, it's mighty flatchulent), and a ready plesnt⁽¹²⁾ pen.

しかし、これとて全体の揶揄的な context の中で読んだ場合、おそらく Bulwer 自身にとっては、その賞め言葉自体がまったく癪にさわる、patronizing な侮蔑と感じられたことだろう。数年後の1847年、打ち続く攻撃に耐え切れなくなった Bulwer は、Thackeray を相手どって決闘を申し込もうとまで思いつめたことが知られているほどで、Bulwer が上の文章の中に悪意以外の何物をも読み取ることができなかったのも無理はない。しかしこの一文の真意はけっして揶揄嘲笑ばかりにあるのではなく、‘A new Yellowplush addressed to Bulwer has made a great noise and has hit the Baronet pretty smartly, it is very good natured however’⁽¹⁴⁾ と Thackeray 自身が言っているように、これは Bulwer の作品の短所をけなしながらも、その長所を率直に認めたものであると考えてよいと思う。

では Thackeray は Bulwer のどこを長所と考え、何を短所とみなしたのか、それについては、上の一文よりおよその見当はつくようである。要するに Thackeray は、軽い筆さばきによる笑いの要素を Bulwer の長所と認める一方、Bulwer が悲劇ぶったポーズをとり、情念の深さ、強さ、理念の高邁さ、あるいは詩的なもの、悲劇的なものを表現しようとするとき、いつも鼻もちならぬ誇張や affectation に落ち入ることに我慢がならなかったのである。情念の深さや強さ、理念の高邁さ、こういったものは、作者自身がそれらの資質を内蔵した上で、その資質を無意識に吐露することによって、はじめて表現できるものだろう。たとえこれらの資質を持ち合わせていても、それを意識的に述べ立てたのでは、鼻もちならぬ教戒癖や道德臭がつきまとう。ましてやこれらの資質に乏しい作家が、話の都合上、それを表現しようと意識的に努力し、小手先の技巧をこらすとすれば、その結果は極彩色に塗りたくった不自然さが生じるばかりだし、自分で的確に把握せず、実感もしていない高遠なものを表現しようとするものだから、話の筋に無理が生じ、用語は空疎で大仰になってくる。これが Bulwer の欠点だったのである。一方の Thackeray は元来無類の照れ屋であり、その作品の中でも、自分が手放して感傷に溺れ、理想に走ることをたえず恐れ、はにかんでいるのが、ありありと感じられる。この含羞性を独特の持味とする Thackeray には、Bulwer は鉄面皮もはなはだしい作家と見えたことだろう。この二人の対立には、こういった気質上の相異があずかって大いに力があつたと考えられるのである。

Thackeray は 1847 年 *Punch* に *Novels by Eminent Hands* という一連の戯作を連載している。そしてその中の一つ *George de Barnwell, by Sir ELBL* は、Lillo の作品から人物名を

(12) Thackeray ; *Works* (Biographical Edition) vol. III, p. 361

(13) Hollingsworth ; p. 200

(14) *Letters* ; vol. I, p. 412

借りて、Bulwer の *Eugene Aram* をたくみに揶揄したもので、Thackeray の Bulwer 批評のうちもっとも重要なものの一つとなっている。そして Thackeray はその冒頭で Bulwer の ‘frequent employment of the Beautiful and the Ideal, the brilliant display of capitals’⁽¹⁵⁾ を皮肉っているが、これもこの用語の空疎さとそれに表わされる Bulwer の厚かましき、臆面のなさをあてこすったものと言えるだろう。そしてまた学問に対する情熱を描かんとして、安価な sensationalism に走り、金めあての殺人犯 Aram の犯行を美辞麗句に飾って、無理にこれを理想化する Bulwer の不自然さ、moral topsi-turviness に反撥した Thackeray が、‘Let your rogues in novels act like rogues, and your honest men like honest men ; don’t let us have any juggling and thimblerrigging with virtue and vice, so that, at the end of three volumes, the bewildered reader shall not know which is which.’⁽¹⁶⁾ と叫んで、*Catherine* や *Barry Lyndon* などの作品を書いたことは、あまりにも有名である。Thackeray の Bulwer に対する反応の形式はおよそこんなものであったが、次にわれわれは Bulwer の作品の幾つかに当たってみて、Thackeray の反応の是非を検討してみなければならない。

Thackeray は1832年の5月、*Eugene Aram* の読後感を次のように日記に書いている。

Read Eugene Aram but was much disappointed (as usual) It is a very forced and absurd taste to elevate a murderer for money into a hero——The sentiments are very eloquent clap-trap. There is no new character (except perhaps the Corporal) & no incident at all——Aram’s confession is disgusting, it would have been better, more romantick at least, to have made him actuated by revenge hatred jealousy or any passion except avarice, which is at more variance with the character given him in the Novel, than would have been a hotter & (as we suppose) a nobler passion ——The book is in fact humbug, when my novel is written it will be something better I trust——One must however allow Bulwer wit and industry.⁽¹⁷⁾

この小説の主人公 Eugene Aram のモデルは、学校教師をしながら、言語学について一流の知識を備えていた実在同名の人物で、殺人の罪で1759年に死刑に処せられた男である。小説の舞台は片田舎の Grassdale で、Lester という紳士が二人の娘といっしょに暮らしている。姉娘の Madeline は近在に隠棲する碩学 Eugene Aram の学究的生活態度に魅せられて、これと婚約する。Aram は学の蘊奥を極めた人間で、その盛名を聞き及んだ政治家某侯爵は、彼を政治顧問にと三顧の礼をもって迎えるが、Aram はそれよりも学問が大事と、これを辞退するほどの人物である。が、どうも Aram の身边には何か不思議な祕密の黒い影がつきまといっているようである。一方 Lester の家には甥の Walter が寄宿している。彼の父はいつごろからか消息を絶ち、その行方は杳として分からない。そこで Walter は村に住む退役陸軍伍長

(15) Thackeray ; *Works*. (The Oxford Thackeray) vol. VIII, p. 83

(16) Thackeray ; *Works*. (Biographical Edition) vol. IV, p. 542

(17) *Letters* ; vol. I, p. 198

Bunting を供に連れ、父の行方を探るべく、遍歴の旅に出る。そして手がかりを辿って行くうちに、Eugene Aram が父を殺して金を奪ったらしい疑いが濃くなって来る。かくして天網恢々、疎にして漏らさずの言葉どおり、Eugene Aram は Madeline との結婚式の前日に逮捕され、死刑に処せられる。そして彼が遺した告白によって、その犯罪の事情は明らかとなる。Aram は赤貧洗うがごとき生活を送りながらも、学問に精進していたが、ついに日々の糧にも窮し、研究は挫折に瀕する。そこへ Walter の父が現われ、悪事を働いて得た金にあかせて酒色にふけり、傍若無人の放埒の振舞に及ぶ。これを見せつけられた Aram はこう考える。このような放蕩者が生きていても、人類には何の益にもならず、かえって害になることが多い。その半面、もし自分が彼の所持する金を手に入れることができれば、現在の研究を完成し、その成果によって大きく人類に裨益することができる。Aram は自分の動機をこう正当化して、独白する。

I looked on the deed I was about to commit as a great and solemn sacrifice to Knowledge, whose priest I was.

そして犯行を終えたあと、彼は言い知れぬ高揚を感じる。

The burning desires I have known—the resplendent visions I have nursed—the sublime aspirings that have lifted me so often from sense and clay : these tell me, that whether for good or ill, I am the thing of an immortality, and the creature of a God.....I have destroyed a man noxious to the world ! with the wealth by which he afflicted society, I have been the means of blessing many.⁽¹⁸⁾

およそこういったところが *Eugene Aram* の荒筋である。そしてそれだけを聞いていると、Aram はドストエフスキーのラスコリニコフを連想させるけれども、この作品には、「罪と罰」のもつ、あの nightmarish な雰囲気は一つも見られない。Aram という主人公は寝食を忘れて日夜研究に没頭する大学者という触れ込みなのだが、はたして彼が何を研究しているのやら、その点の説明は何一つないし、彼が現実的に学問研究をしている場面は一度も出て来ない。つまり Aram には学者としての実体が全然ないわけである。Bulwer は、殺人を犯すほどに強い学問への情熱、真理探究の意欲といったものを描くつもりだったのだろうが、その話自体が無理な上に、主人公がただ学者ぶったポーズをするだけで、勿体ぶったせりふを振り廻すのが精一杯であるから、その非行を理想化しようとする響きの高い言葉が、ますます空ろに、誇張されて聞こえるのである。

一方、もう一つのエピソード、Walter が行方不明の父を探して遍歴の旅に出る部分は、Aram の話に比べると、ずっと軽妙でおもしろい。Walter が伴に連れて出る Bunting 伍長はまことに世なれた男で、この二人の旅の物語は *Gil Blas* 流の漫遊記であり、軽妙な社会諷刺に富んでいる。そしてこの部分の Bulwer の筆は、Aram の部分の重苦しさとはおおよそ対照的に、生彩に富み、才気にあふれていると言ってよいだろう。

(18) *Eugene Aram* ; Bk. V, Chap. VII

このように、Bulwer の長所は、彼が思想的含蓄のない、表面的な軽い主題に取り組み、諷刺や風俗描写に専念するときに発揮され、彼が情念の強さ、深刻さ、哲学的な理念といったものの描出につとめ、まじめな、真剣ぶった題目を取り扱おうとするとき、彼の筆は空疎になるのである。これはけだし、そういった高遠深刻な問題が、しよせん彼にとって異質のものであり、彼が自らの中にないものを努力して描き出そうとした無理に原因することなのだろう。

Pelham, Adventure of a Gentleman についても同じことが言える。名門の御曹子で、きわめて多方面の才能をもった主人公 Pelham は、その才にまかせ、イギリスとヨーロッパの政界、社交界を股にかけ、縦横の活躍をする。これをこの物語の横糸とするなら、もう一方の縦の糸は、主人公 Pelham の高校時代からの親友 Glanville にまつわる謎である。この Glanville は生来の高邁な性格とはうらはらに、賭けごとにつつを抜かし、ロンドンやパリの暗黒街に出入りして、Tyrell という無頼漢のあとを追うという謎の生活を送っている。やがて事情は明らかとなる。Glanville はかつて Gertrude という女性を愛していたが、Glanville の留守中に Tyrell が Gertrude に言い寄り、暴行を加えたため、Gertrude は発狂して死んでしまったのである。かくして Glanville は復讐の鬼となって Tyrell を追ひ、その生命を狙う。その後 Tyrell は競馬でもうけた金を狙われて、悪漢 Thornton に殺される。かねて Glanville が Tyrell に殺意を抱いていたことを知っていた Thornton は、Tyrell 殺害の罪をたくみに Glanville にきせかける。Pelham は親友の無実を立証するため、稀代のスリ師 Job Jonson の手引きを受け、St. Giles' や Seven Dials といったスラムの奥深くに入り込み、活劇を演じて Thornton を捕えるのである。

この小説のうち、Pelham の社交的活躍の部分は、いささか軽佻のそしりは免れないにしても、当時の上流社会の風俗をよく活写しており、この作品が時流に投じて silver-fork school の代表作となって、爆発的人気呼んだのも、あながち不思議なこととは思えない。その半面、復讐の念に馳られた Glanville にまつわる謎の解決の部分では、前途有為の生涯を棒に振っても、愛する女の仇を討とうとする Glanville の姿は、作者の多大の努力にもかかわらず、いっこうに悲壯感を伝えない。またスラムの生態描写や flash language の利用など、いわゆる Newgate Novels の趣好も盛られてあるが、その話の運びはまことに生硬であり、やたらと筋を複雑にするばかりで、読者の興味をつないで行く点にかけては拙いと言わざるを得ない。

次の作品 *Paul Clifford* についても、また同様である。孤児 Paul Clifford は親切な居酒屋のおかみに育てられて成人するが、無実の罪で牢に入れられているうちに大盗賊となり、夜は街道で追剥ぎをやり、昼はそしらぬ顔で上流社交界に出入りして、佳人 Lucy Brandon に恋をする。一方 Lucy の叔父であり、後見人である弁護士 Brandon は、出世欲の権化ともいうべき人物で、判事に出世するために、姪の Lucy を放蕩貴族 Lord Mauleverer に取りもとうとつとめていた。やがて Brandon は首尾よく判事に任命され、Paul Clifford は先にも述べたように、Macgrawler の裏切りのため捕えられて、Brandon の前で裁判を受ける。ところが Brandon は若い頃に一度結婚していたが、その相手の女の身分が低いため、自分の出世の

邪魔だとして、これを捨て去っていたのである。女はせめてもの腹いせに、Brandon との間
に生まれた男の子を奪って行く。この女がロンドンの場末の酒場で行き倒れ、残された子供は
Paul と名づけられて、居酒屋で育てられたという事情が明らかとなる。かくして泥棒を捕え
てみれば何とやらの諺を地で行って、因果にも Brandon は実の我が子に死刑を宣告せねばな
らない羽目になる。

この小説においても、上流社会を泥棒の社会にひきうつして諷刺する *Beggar's Opera* 流の
皮肉はかなりに成功している。大盗賊 Paul Clifford が義人で、これを裁く法律とその代表
者 Brandon の方こそ、後暗いところが多いという構成、それにまた、大泥棒たちが他の小ぬ
すつと共を軽蔑し、自分たちだけの社交界を作り、自ら The Exclusives と称したりするく
んだりや、その大泥棒の集団の頭目を Gentleman George、その一の配下を Fighting Attie 等
と名づけて、George 四世と Wellington 公をはじめ、当時の権力者を当てこするところは、
当時流行しはじめた roman à clef の作法を利用してたくみである。さらにまた泥棒社会と上
流社会の同一性を唱える Tomlinson といった cynical な人物も軽妙に描かれていて、読者
の興味をつなぐ。ところが Brandon と Paul Clifford の血縁関係の話は、見えすいた因縁話
をむやみと謎めかしたものでり、そもそもの原因となる Brandon の出世欲が、あまりにも誇
張されているため、Brandon は不自然な、重苦しい、Byron 的怪物になってしまっているの
である。

Cazamian はその著 *Le Roman social en Angleterre 1830—1850* において、この Paul
Clifford を「功利主義小説」の代表として取り上げ、

「ブルワーは唇に薄笑いを浮かべて、法律が破滅させ、又は墮落させる惨めな人々の生活
を弁護するが、このユーモアは熱意ある根柢によって支えられず、浅薄で浮々して、手
取早くいえば、偽りのものになっている。……不幸な人々に関する親しい知識も、法律の犠
牲者に対して感じられた憐憫もない。一言でいえば、心の誠実さが全くない。ここに、この
小説の如何ともし難い欠点があるのである。……ブルワーにおいては、人間と作品の諸欠点、
精神的な潤いのなさ、わざとらしさ等が、ディケンズ及びキングズレーの熱烈な信念と正に
最も完全な対比をなしている。⁽¹⁹⁾」

と批評しているが、この意見に対しては、いささかの留保を付さなければならない。Cazamian
は功利主義が悪玉であり、これに対して情緒的理想主義的小説が立ち上がって、英雄的反抗を
なし、人間の精神的危機を救った、という図式の樹立に急なあまり、功利主義に代表される主
知的態度よりも、理想主義に表わされる情緒的態度の方が価値が高いという、先験的価値判断
より出発していると思われる節もないではない。たしかに Dickens の小説は Bulwer のそれ
よりも秀れているだろう。しかし、それは物語の技巧、登場人物の肉づけ、対象に対する観察
眼等々、多くの芸術的才能において、Dickens がより秀で、Bulwer がより凡庸であった結果
であり、Dickens のとった情緒的な心的態度が、Bulwer の一見主知的な態度よりも、その態

(19) Louis Cazamian ; *Le Roman social en Angleterre 1830—1850*. vol. I, p. 89—93

度自体においてより高級であるということの証拠にはならないと思う。

これだけの留保をつけたあと、もう一度 Cazamian の意見を考え直してみると、そこには興味ある事実が浮かび上がってくる。Thackeray の、ひいては今のわれわれの見地からすれば、Bulwer に貧者への同情を要求し、それに欠けているのがこの小説の欠点であると言うのは、いささか撞着のきらいがある。なぜなら Bulwer は、そのような感情的要素を除外した場合にもっともよく自分の長所を発揮しているのであり、彼が感情的な題材を扱うときには、必ず誇張や不自然などの短所が暴露される、とわれわれは考えるからである。従って Bulwer の長所は、たとえ軽佻浅薄のそしりは免れないにしても、断然その乾いた理知的な wit にあるのであって、彼に Dickens 流の情動的熱意を求めることは、いささかお門違いということになる。たしかに Bulwer はこの種の情動的熱意を描こうと努力した。しかしその企ては Eugene Aram や Brandon のような重苦しい人物に結果し、失敗に終わったと言ってよいだろう。しかるに Cazamian は Bulwer に Dickens 流の情動喚起性を要求し、この Brandon について、われわれとは全く正反対の評価を下しているのである。すなわち、

「山賊の伊達男ポール・クリフォードやその手下どもは、全く空想の産物であり、その性格は全く論理的な線で描かれていて、実人生の熱情と深みを想起させるものは何もない。ただブランドンの姿のみが、多少の活力をもっている。」⁽²⁰⁾

Cazamian は文学の情動喚起性を重視したが故に、このように *Paul Clifford* を wit の遊戯にすぎないと考え、その中で見るべきものは Brandon だけであるとの結論に達したが、Bulwer の wit を評価する Thackeray の立場に立つなら、この Brandonこそ、Bulwer が生半可に情動喚起を試みた失敗例ということになるのである。Bulwer の文体についても同様の事実がある。Thackeray にとっては、Bulwer の文体は鼻もちならぬほど空疎で大仰なものに思えた。

There are sentiments in his writing which always anger me, big words which make me furious, and a premeditated fine writing against which I can't help rebelling.⁽²¹⁾

ところが情動的な文学観をもった批評家から見れば、同じ Bulwer の文体は 'instinct of power' であり、'mighty rushing wings of a supernal tempest'⁽²²⁾ にたとえられるのである。このように見る人によって正反対の評価が成り立つというのは、とりもなおさず、Bulwer の中に、それに対応する二種の要素が並存していたことを示すものと言ってよいだろう。そしてこの二種の要素、すなわち乾いた理知的 wit と激しい情動喚起性、が並存していたが故に、Bulwer は時代の要求に即応し、流行作家の地位を保ち続けることができた半面、その二つが並存するだけで、統一融合されていなかったため、Thackeray の非難を招くことになり、や

(20) *ibid.*

(21) *Letters*; vol. II, p. 485

(22) George Gilfillan; *A Gallery of Literary Portraits* (Everyman's Lib.) p. 219

がて忘れ去られる短命な作家たるに止どまったと言ってよいだろう。

Bulwer の大仰さについての Thackeray の批判はこれくらいにして、もう一つ別の項目を取り上げてみよう。Thackeray は *George de Barnwell* の中で次のように言っている。

George outdoes all the dandies, all the wits, all the scholars, and all the voluptuaries of the age—an indefinite period of time between Queen Anne and George II.....

Some trifling inaccuracies may be remarked in the ensuing brilliant little chapter; but it must be remembered that the author wished to present an age at a glance.⁽²³⁾これは明らかに、Bulwer のまた別の作品 *Devereux* を当てこすったものであるから、話を進める都合上、いささか冗長になるけれども、ここで *Devereux* の梗概を述べておきたいと思う。

主人公 Morton Devereux はカトリックを信奉する旧家 Devereux の末流である。幼くして父を失った Morton は、二人の兄弟といっしょに、伯父 Sir William Devereux の厄介になる。兄の Morton は器量も悪く、外見やや鈍重であるのに反し、双生児の弟 Gerald は、美貌、活潑で、才気があり、人好きがする。そのため Morton と Gerald の間には rivalry が生じ、不信が芽生える。伯父の Sir William はしかし Morton を愛し、これを自分の相続人にしようと思っている。おとなしい末弟の Aubray は信心深く、家つきの司祭である Jesuit の Abbé Montreuille に熱心に帰依している。ところでこの Abbé Montreuille は神出鬼没の謎の人物で、Jacobite の陰謀に加担したり、たえず何か政治的策謀に奔走し、その軍資金のために Devereux 家の財産を狙っている様子も見える。主人公 Morton は近在の一軒家に住むスペインの亡命貴族 D'Alvarez の娘 Isora を見染めるが、宿敵である弟の Gerald が何か政治上の陰謀にからむ謎の影響力をこの一家に及ぼしているらしいことが分かる。やがて D'Alvarez 一家は忽然として姿を消す。その後 Morton ははからずもロンドンで最愛の人 Isora と再会するが、ここでも Gerald らしい謎の人物が Isora につきまとい、Morton と結婚したら生命はないぞと彼女を脅迫していることを知る。Morton はこの脅迫を無視して Isora と結婚するが、それとほとんど時を同じくして、伯父の Sir William が死ぬ。しかし、予想に反して、遺産の大部分は弟の Gerald に譲られ、Morton は廢嫡同然の扱いを受ける。Morton はこの遺言書を偽造と信じ、調査を続けるうちに、刺客に襲われ、彼をかばおうとした Isora は刺し殺される。かくて Morton はイギリスの国に愛想を尽かし、フランスとロシアを渡り歩いて、摂政オルレアン公やピーター大帝に重用され、社交界政界に華やかな活躍をする。やがて Morton は形式ばった政治生活や虚飾に満ちた社交界に厭気がさし、引退を決意して故国イギリスに帰る途中、イタリアの山村に隠棲するうち、近くの洞穴に住む隠者司祭と知り合う。この司祭がはからずも末弟の Aubray で、彼は二人の兄が仲良くなって自分一人が除け者になるのを恐れ、たえず Gerald と Morton の仲を裂くように仕向けていたこと、伯父 William の遺言書を偽造したのも、また Morton を襲い、その恋人 Isora を殺したの

(23) Thackeray ; *Works*. (Biographical Edition) vol. VI, p. 471

も、すべて Abbé Montreuille にそそのかされて自分がしたことだと、臨終の告白を残して死んで行くのである。かくのごとく、Bulwer はこの小説の中に、謎の政治的陰謀、遺産争奪、恋にからむ殺人など、あまりに多くの事件を盛り込みすぎ、舞台をヨーロッパ全土に拡げたあげく、話の收拾に困って、臨終の告白で謎ときをするという陳腐月並な技巧に頼るのである。しかも話の規模の大きさに比して、その結末があまりにも貧弱で、竜頭蛇尾になるのを気にとがめたのか、Bulwer はこの Aubray の臨終の告白に重味をつけようと技巧をこらし、凄味を出す努力を惜しまない。そしてその結果が、荒野の洞穴で、原始に近い生活を送り、孤独と戦いながら、過去に犯した誤ちの慚愧に苦しめられ、倒錯した情念のとりこになり、ついに発狂して死んで行く sensational な隠者司祭 Aubray の姿なのである。この Aubray という人物は、わずかに怪奇感をかもし出すには成功していても、その印象はきわめて不自然であり、病的である。これもまた Bulwer の情動喚起の試みの失敗例と言ってよいだろう。しかしここで *Devereux* という作品を取り上げたのは、なにもそのようなことを指摘するためではなく、この小説の舞台を1710年から1720年にかけての時代に設定した Bulwer の時代考証を論ずるためなのである。

この小説の第二巻、主人公 Morton がロンドンに出かけるあたりは、さながら十八世紀ロンドンの風俗小説の感がある。Will's Coffee House には Addison や Steele が現われるし、主人公 Morton は St. John Bolingbroke と親交を結んで哲学を論じ合い、Don Saltero's Coffee House や Kit Kat Club を訪れ、Sir Godfrey Kneller に肖像画を描いてもらうといった風である。恋わずらいの主人公をからかう軽いせりふにも、

What has altered you? you drink not, neither do you play. The women say you are grown duller than a Norfolk parson, and neither the Puppet Show, nor the Water Theatre, the Spring Gardens, nor the Ring, Will's, nor the Kit-Cat, the Mulberry Garden, nor the New Exchange, witness any longer your homage and devotion.⁽²⁴⁾

といった工合に、十八世紀風俗への言及はまことに絢爛豪華を極めると言ってよいだろう。しかしその半面、Bulwer のこういった時代考証はいささか pedantic であり、作品そのものの中に有機的に織り込まれているというよりも、むしろ Bulwer が自らの博学ぶりをそこで開陳に及んだという感じがし、作品自体の本質と遊離している点が欠点として指摘されるだろう。たとえばこの小説の第三巻において、Morton は Oliver Cromwell の遺子で、今は隠退生活を送っている Richard Cromwell に偶然出くわし、その家に招かれる一章があるが、これは話の筋の展開とは全然無関係なエピソード、わるく言えば作者の遊びにすぎないのである。

これと同じことは、*The Last Days of Pompeii* についても言える。ポンペイに住む裕福なギリシャ人 Glaucus は、同じアテネ生まれの歌姫 Ione を愛している。ところがエジプト人の魔術師 Arbaces が Ione に横恋慕し、彼女がなびかぬのに業を煮やし、手ごめにしようと

(24) *Devereux* ; Bk. III, Chap. I

するが、Ione の弟 Apæcides に妨げられる。これを逆恨みにうらんだ Arbaces は Apæcides を殺し、その罪を Glaucus に着せかける。Glaucus は闘技場でライオンと闘う刑に処せられるが、そのときヴェスヴィアス火山が爆発して、危く虎口を脱する。これがこの小説の荒筋である。そしてその中に、殺された Apæcides の葬式を描写する一章があり、古代ポンペイの葬式の式次第が事細かに述べられてあるが、これとて小説の本筋とは何の関連もなく、たかだか時代色を出すための小道具の一章、Bulwer の博学披露の一章たるに止どまっているのである。

The Last Days of Pompeii についてよく言われることだけれども、その話の内容や登場人物の性格などは全く Regency の時代のものであり、この小説にはヴェスヴィアス火山の爆発以外、紀元一世紀という時代設定を必要とするものは何もないのである。このように *Devereux* や *The Last Days of Pompeii* などの歴史小説において、その時代色を示す部分と小説の本筋とが integrate されず、全く遊離していることが、Bulwer の歴史小説の根本的欠陥であると言えるだろう。この点を的確に突いたのが先に引用した Thackeray の言葉なのであり、Thackeray は Bulwer が *Devereux* において1710～20年という漠然とした時代を匂わせるだけに終わり、たとえば1715年なら15年という厳密な時間を小説の中に組み入れることができなかった構成の甘さ、時代考証のあいまいさを批判したのである。

このように Thackeray は Bulwer の空疎な誇張、その結果である文体と物語構成両面の不自然さに強く反撥し、次いでその時代考証のあいまいさを指摘した。第一の反撥は明らかに Thackeray と Bulwer の異質性に原因するものであるが、第二の批判は、十八世紀という時代に対する興味の共通性を基盤にしたものである。また Thackeray と Bulwer の間の共通性は、この一点に止どまるものではなく、他にも多く見出される。そしてその共通性がまた Thackeray の Bulwer に対する反撥を強くしたと考えられるから、ここで目を転じて、この二人の間の類似性を考察してみたいと思う。

Bulwer と Thackeray はともに Dandy として社交界に華やかな名を売った男であったが、この点だけでなく、その作家的性格においても、この二人にはいろいろ共通点があったと考えられる。Bulwer は1840年版の *Pelham* の序文で、

I think, above most works, it contributed to put an end to the Satanic mania, —to turn the thoughts and ambition of young gentleman without neckcloths, and young clerks who were sallow, from playing the Corsair, and boasting that they were villains.

と述べ、この作品の目的の一つを Byron 崇拜思想の退治だとしているが、anti-Byronism は後ほど Thackeray の大いに主唱したところである。Bulwer の長所が思想的含蓄のない、軽い風俗描写にあることはすでに述べたが、これも Thackeray のもっとも得意とした分野であることは、誰しも認めることだろう。そしてまた描写される風俗が主として Regency 時代のものであったことも共通しており、賭博場とこれに出入りする紳士たち、食道楽にうつつを抜かす

男など、*Pelham* の社交界描写に利用された材料の多くは、Thackeray にもなじみの深いもので、いずれも彼の作品の中に採用されている。*Paul Clifford* に出て来る すれっからしの放蕩貴族 Lord Mauleverer には、*Vanity Fair* の Lord Steyne の姿が予兆される感じであるし、上流社会を泥棒社会になぞらえて諷刺する手口も、上流社会を召使の社会にひきうつす Thackeray の手法と酷似している。*Eugene Aram* に登場する Bunting 伍長の語る、世間を知るには召使になるのが一番、という言葉、

To my mind, sir, there is not a place from which a man has a better view of things than the bit of carpet behind a gentleman's chair. The gentleman eats, and talks, and swears, and jests, and plays cards, and makes love, and tries to cheat, and is cheated, and his man stands behind with his eyes and ears open.⁽²⁵⁾

は、*Yellowplush* をはじめ、*Pendennis* の凄腕の召使 Morgan など、Thackeray 得意の sophisticate された召使の一群を想起させるものである。また夫婦なれ合いで、妻が情人をもち、色仕掛けで金銭を巻き上げ、夫に貢ぐという上流社交界の美人局のからくりを、Bunting が語るくだりがあるが、これも Lord Steyne と Becky, Rawdon Crawley の三人の関係を連想させる。さらにまた Bulwer の社会評論 *England and the English* も、そのジャンルにおいて、Thackeray の *Book of Snobs* に近いものである。このように Bulwer と Thackeray の間には題材の面から見ても多くの同質性が認められるだけでなく、さらに根本的な問題でも、この二人は共通したところをもっていた。上述の諸作品における風俗小説的部分での Bulwer の心的態度は、作者の view-point を大局高所にもち上げ、そこから俯瞰的想像力をもって、人間の世の中を倭小化して眺め渡し、そこに dry で cynical な wit を働かせるというもので、これがまた Thackeray の態度ときわめて類似しているのである。

Thackeray の Bulwer 批評が常識の域を越えてしつこいものだったのも、おそらく両者の間のこの共通性、同質性にその源を発することと考えてよいだろう。もし Bulwer が Thackeray と全く異質な存在で、二人の間に何一つ共通する要素もなかったら、おそらく Thackeray も、Bulwer を縁なき衆生と観じて、あれほど目くじらも立てなかったろう。対象を仰角的に眺め、拡大誇張して描くことを自分の使命と考え、憐憫、恐怖などの情動喚起をもっぱらにした Dickens に対しては、Thackeray の批評態度が淡白そのものであった一事からしても、これは想像のつくことである。また逆に Thackeray と Bulwer の間の同質性がもっと大きければ、Thackeray も Bulwer を我が党の士として歓迎したことだろう。ところが現実の Bulwer はそのどちらでもなく、虫酸の走るような大仰なせりふを並べるかと思うと、ときとして乙にさばけたことを言うといった、鶴のごとき存在だったのである。かくして Thackeray は Bulwer の感傷癖、誇大癖に激しい反感をそそられる一方、Bulwer の作品に感じられる自分との同質性にひどい焦ら立ちを覚えた。Bulwer は冷静皮肉な目で眺めた社会風俗諷刺という立派な素材を捕えながら、その扱いは不充分で、持前の感傷や誇張に災され、せっかくの題材

(25) *Eugene Aram* ; Bk. IV, Chap. II

を台無しにしてしまっていた。しかもこの素材こそ、Thackeray が作家として自らよってもって立つべきところのものと意識しはじめていたものだった。Bulwer がこの素材をみごとに利用して、完璧の作品を作り上げたのなら、Thackeray も潔くこれに脱帽するくらいの度量は十分に持ち合わせていたことだろう。ところが Bulwer のこの素材の扱い方たるや、まことに不十分、不徹底であり、小癩に気を利かせた、小生意気な半可通に終っていた。そしてそのような作品が版に版を重ね、世間でもはやされているのを見るにつけ、Thackeray としては、せっかく大事にのけておいた御馳走を Bulwer に汚らしく食い散らされたような気がして、拱手傍観もしておられぬ気持だったのだろう。また別のたとえを用いるなら、自分の将来の trade-mark と心がけていたものが、いつの間にやら Bulwer に盗用され、その商標のもとで劣悪な商品が市場に氾濫し、そのため自分の同種類だが、より高級な品が閉め出されている、と思ったのである。

かくして Thackeray にとっては、Bulwer は文壇への登竜門に大きく立ちはだかる邪魔者と見えたわけである。今のままでは、自分の書くものは、すべて Bulwer の模倣か二番煎じとしか見えないだろう。自分の独自性を打ち樹てるためには、すべからくこの大きな邪魔者を打倒し、彼我の相違をはっきり主張し、彼を超克せねばならない。Bulwer 攻撃に乗り出した Thackeray の心理は、おおよそこのようなものだったろう。そしてそこには自己主張や、相手を貶めて喜ぶ悪意が入ってくる可能性は充分あると考えられるのである。

この場合、不言実行の言葉通り、だまって Bulwer にまさる作品を書き上げるのが、一番紳士のらしくもあり、また安全な道だろう。ところが幸か不幸か、Thackeray は批評家と作家の二枚看板をかかげ、世すぎ口すぎのためにも、批評の筆をとらねばならなかった。そしてまた1840年代はじめの Thackeray の作品がお世辞にも Bulwer の作品を凌いだといえる代物でなかったことは、事実が示すとおりである。意識は高いが実践の伴わぬ、いわゆる眼高手低の時期にあった Thackeray は、自然な焦慮を感じて Bulwer を批判した。ここに Thackeray の Bulwer 批評の純粋性が疑われ、その動機が‘malignity of jealous failure’にあったと言われる原因があるのである。そして動機の純粋性に疑いの余地があり、彼の現実の批評が個人的中傷を含むものであったからには、Thackeray は Bulwer に何らかの spite をもっていたと判定されても仕方のないことであり、それを‘genuine critical reaction’と呼ぶのには、われわれとして、いささかためらいを感じざるを得ない。

およそ他人を批判する場合、職業的批評家や教師という特殊の場合を除いて、その批評が純粋な批評であるのか、悪口であるのか、区別は非常にむずかしい。そしていつの場合にも、当事者の主観的意図とは別に、客観的には、その批判がねたみや悪意に発するものではないかという疑いが、必然的に生じて来る。だから Thackeray の Bulwer 批評も、この意味で純粋ではあり得ないわけであり、その不純性を今さら云々してみても始まらないだろう。だから、われわれとしては、この Bulwer 批評が Thackeray 自身に対してもっている意義を検討することの方が、もっと大切と思うのである。われわれが他人を批判する場合、それに随伴して、

その批判の正しいことを我が身において具体的に立証する責任が生じて来る。職業的批評家にあらざる限り、相手を批判したからには、その点については、自分が相手を凌駕していることを実証せねばならないのである。この実証ができるなら、多少えげつなくても、その批判は正当化されるし、もし実証できなければ、主観的動機がどうであれ、その批判は悪口になる。Thackeray の Bulwer に対する関係は、先にも言ったとおり、職業的批評家の作家に対するものではなかったから、Thackeray にも Bulwer を凌駕する責任が課せられるのは当然であり、彼は自分の Bulwer 批判の単なる悪口中傷にあらざる所以を証明するために、Bulwer を凌ぐ作品を書かねばならぬ瀬戸際に、我れと我が身を追いやり、背水の陣を敷かざるを得なくなったと言ってよいだろう。だから *Vanity Fair* は、Thackeray の批評家活動の総決算という意味をもつ作品になるのであって、Fashionable novels, Newgate novels, Military novels 等々の当時流行の小説作法をたくみに裏返して利用し、これを当てこすったこの作品の反動的性格も納得がいくのである。十年間彼は多くの小説家たちを撫で斬りにして来たが、それが決して悪口や中傷でもなく、無責任な放言でもなかったことを、芸術的な形で実証してみせる、Thackeray はこういった意気込みでこの作品に取りかかったに違いない。

ところで、Thackeray の Bulwer に対する態度は、この *Vanity Fair* を境にして一変しており、それまでのえげつない揶揄の言葉は影をひそめている。不遇の身にある間は批判精神の旺盛だった人間が、一旦相應の地位につくと、けろりと批判の熱がさめるという事例は、世上まま見受けられるものである。そしてここにも Thackeray の Bulwer に対する批判がすべて中傷だったという説に符合する事実が見出されるようにも見える。しかし Thackeray は決して自分が成功したから Bulwer を批判しなくなったのではないのである。*Vanity Fair* を書きはじめたときには、もちろん彼は Bulwer をかなり意識していたことだろう。しかし書いて行くうちに芸術的な興が湧いて来た。作者に興が湧いてくると、それは素直によい作品となって読者に伝わり、それが好評という形でまた作者に帰って来て、いっそう作者の感興を励ますことになる。この好循環の波に乗った Thackeray は、はじめて *Vanity Fair* において、我を忘れた創作の喜びを味わったのである。このいわゆるインスピレーションの状態は、人間の倭小な諸雑念の介在を許さず、それを洗い流す不思議な効果をもっている。*Vanity Fair* には、それ以前の Thackeray の作品に見られる猥雑さが淘汰されて、たいへんすっきりとしたものが感じられるのも、作者の側のこの純粹の感興の表われだと考えてよいだろう。そして Thackeray は *Vanity Fair* を書く間に、その芸術的感興によって自信を得、それとともにいつしか Bulwer obsession から解放されたのである。

かくして Thackeray は、成功の緒についた今、自分の来し方を振り返ってみて、きわめて後味の悪いものを感じた。自分の才能を表現する道を暗中に模索し、無我夢中で Bulwer を攻撃していたときには、自分の Bulwer 批判を立派に意義のあることと信じていたのだが、今度は逆に自分が批評される番になってみると、人の批評はみな、ねたみそねみに発するように思われる。そうだとすれば、かつての自分がやったことも、はたして意義のあることだったの

かどうか、言わずもがなの悪口雑言を並べ立てて、浅ましく自己主張を行い、不必要に Bulwer の気持を傷つけただけのことではなかったのか、という疑いが隙間風のように忍び寄って来る。

Jerrold hates me, Ainsworth hates me, Dickens mistrusts me, Forster says I am false as hell, and Bulwer curses me—he is the only one who has any reason—yes the others have a good one too as times go. I was the most popular man in the craft until within about 12 months—and behold I've begun to succeed. It makes me very sad at heart though, this envy and madness—in the great sages & teachers of the world. Am I envious and mean too I wonder? These fellows think so I know. Amen. God knows only. I scarcely understand any motive for any action of my own or anybody else's.⁽²⁶⁾

翌1848年の何月か、Thackeray は Lady Blessington の家に招かれた。話が Bulwer のことに及んだところ、Thackeray は Bulwer の実兄が同席しているのも忘れて、思っただけのことを遠慮なく言っただけらしい。しかし、家に帰った Thackeray は自分の口の軽かったことに対する後悔に耐えられず、Lady Blessington 宛に弁明の手紙を書いた。

I felt ashamed of myself when I came home and thought how needlessly I had spoken of this. What does it matter one way or the other, and what cause had I to select Sir H Bulwer of all men in the world for these odious confidences? It was very rude. I am always making rude speeches and apologizing for them, like a nuisance to society.⁽²⁷⁾

これはもちろん Bulwer 批判そのこと自体を悔いる言葉ではない。一年ばかり前の Bulwer に対する激しい反撥の余燼もさめやらぬ今では、Thackeray の気持はまだそこまで進んでいない。しかし Bulwer の実兄の前で言わでものことを言ったという、etiquette 違反を悔いた唇寒い思いの表現であるこの言葉には、やがては Bulwer 批判そのものを悔いる気持につながる萌芽が蔵されていると見てよいだろう。

はたせるかな、それから一年もたつたため1849年6月に、Thackeray はある青年に宛てた手紙の中で、

I suppose we all begin so (*i. e.* savage)—I know one who did: and who is sorry now for pelting at that poor old Bulwer & others, but it was in the days of hot youth when I was scarcely older than you are now.⁽²⁸⁾

と述べ、はっきりかつての Bulwer 攻撃を後悔している。この文面からすると、Thackeray が Bulwer 攻撃をやったのは大昔のことで、これを後悔する Thackeray はまるですでに老

(26) *Letters*; vol. II, p. 308

(27) *ibid.*, p. 465

(28) *ibid.*, p. 554

境に入っているかのごとき錯覚を覚えるが、これは Thackeray の韜晦の策略であるだろう。Thackeray が *George de Barnwell* を書いたのは1847年、わずかに二年前のことなのである。もちろんここで Thackeray が心に思っているのは、個人的中傷や揶揄の要素が多かった *Yellowplush Papers* 時代のことであるかもしれないが、それにしても、それはそう昔のことではないのである。しかし、おそらく Thackeray の実感としては、自分が Bulwer 攻撃に熱中していたかつての時期は、暦の上はともかくとして、心理的には大昔のことになってしまっていたのである。そしてこの変化をもたらしたものは、もちろん *Vanity Fair* の成功なのである。

このあと Thackeray は *Pendennis* を著し、さらに1852年に *Henry Esmond* を完成した。この *Henry Esmond* は Thackeray が1851年に行った講演 *The English Humourists* の副産物として生まれた作品であるが、これまた Bulwer といささかの関係がなくもないと思われる。1829年十八才の若さの Thackeray は、Bulwer の *Devereux* を読み、‘I could write as good a one myself; I had been rather turning my thoughts to that kind of thing lately.’⁽²⁹⁾ と言いつつ、それから二十年有余の間、十八世紀はいつも Thackeray の興味をそそる時代だった。その間 Thackeray が *George de Barnwell* において、Bulwer の時代考証の甘さを突く批評を行ったことはすでに述べた。そして今や *Pendennis* の労作が終った1850年、彼は日頃親んで来た十八世紀の文人たちについての講演を行うことを思い立ち、直ちにその準備に取りかかった。そして1851年の3月には、

I have been living in the last century for weeks past——all day that is——going at night as usual into the present age; until I get to fancy myself almost as familiar with one as the other; and Oxford and Bolingbroke interest me as much as Russell & Palmerston——more very likely.⁽³⁰⁾

と言うほどに十八世紀の雰囲気に関心したのである。

Henry Esmond はかく十八世紀と親しむうちに生まれた作品であるが、名譽革命以後の Castlewood 子爵家の盛衰を語るこの小説は、1691年の発端から、ときとして1688年に遡りつつ、1714年に及ぶ二十七年の月日の経過を扱っている。そして Addison や Steele, Lord Mohun や Duke Hamilton など歴史上実在の人物をたくみに作中人物とからみ合わせ、Blenheim や Ramilles の戦闘などの歴史的イベントを利用しながらも、Bulwer のごとき銜学臭はその気配もなく、しかも物語の chronology は、細部におけるわずかの混乱、一二の些細な anachronism は別として、みごとに確立されている。そして読者は三巻四十二章に及ぶこの物語の各章の年代をはっきり知ることができるほどである。時代小説という、はっきり年代の定まらぬ、漠然とした昔のある時期を舞台として設定するものが多い中で、*Henry Esmond* のこの面での業績は注目に値するものだろう。

十八世紀初頭に時代背景を設定したことのほかに、*Henry Esmond* は Bulwer の *Devereux*

(29) *Letters*; vol. I, p. 98

(30) *Letters*; vol. II, p. 761

と話の筋でも幾つか共通点をもっている。まず第一に政治的陰謀の雰囲気は両者の作品に共通していることが挙げられるが、*Devereux* においては、この陰謀が僭王 James Stuart を擁立せんとする Jacobite の運動のみでなく、全ヨーロッパに及ぶ、得体の知れぬ、架空のものをも含んでいて、その内容において、作品の chronology と同様、きわめて不明確な漠然としたものになり、結局最後は尻すぼみに立ち消えている。これに対し *Henry Esmond* においては、話は Orange 公 William を迎えた名誉革命に反対する Tory 派貴族の僭王擁立運動という、明確な歴史的事実に終始し、その運動の劇的な幕切れをたくみに創作して、それで話を結んでいる。この Jacobite の陰謀の扱い方を見ても、Bulwer はそれを外延的想像力でもって描こうとし、その輪郭をぼやかすことによって、それにまつわる神秘感や秘密感といった情動を読者の心に喚起しようとしたのであるが、Thackeray は逆に、外の輪郭から内の細部に向けて内包的想像力を働かせ、的確にこれを認識し、最後は僭王の好色心のために一切は画餅に帰するという、全然感動を容れる余地のない幻滅の結末にもって行くのであって、ここにもこの両者の心的態度の根本的相違がはっきり表わされていると言ってよいだろう。そしてこの陰謀に加担し、神出鬼没の活躍をするカトリック司祭 Abbé Montreuil と Father Holt も、偶然と言うにはあまりにも大きな類似性をもっているように思われるし、Devereux 家の邸内には廃墟になった古塔があり、そこへ秘密の地下道が通じており、ここを通過して謎の人物が邸内に忍び込むことになっているが、これも *Henry Esmond* の中にたくみに取り入れられて、Father Holt がいつも秘密の出入りに利用していた Castlewood 子爵邸のあの仕掛けつきの窓になっている。しかし Abbé Montreuil と Father Holt, 秘密の地下道と仕掛けつきの窓、いずれも前者の方がより漠然とした恐怖感を誘う浪漫的手法で描かれ、後者は全く写実的な扱いで提示されているのである。これらの共通の題材とその正反対の扱いが、全く偶然のものではないという見方が許されるとするならば、*Henry Esmond* はかなりの程度に Bulwer の *Devereux* を意識して書かれたものであり、その作品的価値からして *Henry Esmond* は格段に優っているのだから、Thackeray は *Vanity Fair* と合わせて、ここでもう一つ Bulwer に対して、いわゆる借りを返すことができたと言うことができるだろう。

この後も Bulwer の誇大癖に対する Thackeray の嫌悪の変らなかつたことは、彼の書翰の中の Bulwer についての言及からも分かることである。しかし、虫が好かぬ点は変らぬにしても、今では彼は Bulwer をずっと冷静に眺める余裕もでき、Bulwer の *My Novel* を ‘very dexterously brewed and bottled small beer’ と評し、‘fresh and richer than any he has done’⁽³¹⁾ と賞めることもできるようになった。そして1853年6月には、昔の *Yellowplush Papers* がアメリカで再版になった機会に、その序文に

There are two performances especially (among the critical and biographical works of the erudite Mr. Yellowplush) which I am very sorry to see reproduced,

(31) *Letters*; vol. III, p. 248

(32) *ibid.*, p. 288

and I ask pardon of the author of *The Caxtons* for a lampoon which I know he himself has forgiven, and which I wish I could recall. I had never seen that eminent writer but once in public when this satire was penned, and wonder at the recklessness of the young man who could fancy such satire was harmless jocular⁽³³⁾ity, and never calculate that it might give pain.

と書き、それを Bulwer に知らせて、かつての無礼を詫びる手紙を送っているのである。

ところで Thackeray がこのように賞讃の言葉を送り、また敬意の含蓄において述べた *My Novel* と *The Caxtons* という二つの小説はいかなる作品であろうか。Saintsbury の評言によると、Bulwer は自分の作風を次々と変えて、時流に投ずることにかけては、‘Proteus-chameleon of the novel’⁽³⁴⁾ であった。*Pelham* で Silver-fork school の流行にさきがけ、*Eugene Aram* と *Paul Clifford* では Newgate Novels の流れに投じ、*Devereux* と *The Last Days of Pompeii* で歴史小説を試みるなど、変身の妙を見せて来た Bulwer が、1850年頃の Domestic Novels の流行を感知して、さっそくこのジャンルに手をつけた結果が、*The Caxtons* と *My Novel* なのである。

The Caxtons は田舎に住む一家を扱った小説である。主人公 Pisistratus の父 Austin Caxton は畢生の大著 ‘The History of Human Errors’ の執筆に専心する学者である。その兄 Roland は退役大尉で、de Caxton と名乗り、由緒ある家名の復興を念願して、廃墟になった Caxton 家の古城に一人住んでいる。そこへ主人公にとっては母方の叔父にあたる Jack が舞い込んでくる。これはたえず奇想天外な着想による金もうけを企んでは失敗を繰り返し、他人に迷惑をかけながら、本人は平然としているという人物である。これら三人の、それぞれ奇癖をもった人間が繰りひろげるユーモラスな家庭喜劇を、主人公がその現場に居合わせながらも、決してその渦中に巻き込まれることなく、detachment をもって観察して行く、というのがこの小説の趣好である。Bulwer はその序文において、

It is the first [novel] in which man has been viewed less in his active relations with the world, than in his repose at his own hearth;—in a word, the greater part of the canvass has been devoted to the completion of a simple Family Picture. And thus, in any appeal to the sympathies of the human heart, the common household affections occupy the place of those livelier or larger passions which usually (and not unjustly) arrogate the foreground in Romantic composition.

と言っているが、これは括弧の中の自己弁護の言葉が示すとおり、後髪を引かれたような、煮え切らぬものではあるが、一応 Bulwer として新たな出発の決意の宣言とも言えるだろう。当時文壇の右翼にあった Sensation novelist の一派は、残忍奸智の悪人に配するに、薄

(33) *ibid.*, p. 278

(34) George Saintsbury ; *The English Novel*. p. 217

倅の佳人、勇敢な正義派主人公の英雄的行為をもってして、一連の派手な事件の連続によって、読者の目を奪い、劇的効果による情動喚起を目的とした作品を書いていた。これに反対して登場するのが Domestic novelists の一派で、彼らは自ら chronicler of small beer と称して、日常些細の事件を丹念に綴り、先の Sensation novelists が plot を重視し、登場人物をもっぱら actor に仕立てて、八面六臂の活躍をさせる傾向をもっていたのに対して、作中人物をあくまでも character として取り上げ、写実的な性格描写や、人物相互の、あるいは人物と環境の間の interaction の説明に自らの道を見出そうとしたのである。これまでの Bulwer は、その作風からして、もちろん Sensation novelists の一人として考えられるべき存在であり、Thackeray が執拗に攻撃したのも、彼の作品の中の sensational な要素であったのである。だから Bulwer のこの転身は、Thackeray の批評の勝利だと見ることもできる。⁽³⁵⁾しかし、冷静丹念な描写を旨としようとする Bulwer の試みは、この小説の前半においてこそ成功しているものの、後半の部分では、伯父 Roland の行方不明の息子 Vivian についての活劇が繰りひろげられ、序文における宣言にも拘らず、Bulwer が sensationalism の古い殻をまだ脱け切っていないことを示している。だからこの小説も、あたり前なら、Thackeray の鋭い批判を浴びて不思議でない作品と思われるのである。それが敬意の含蓄をもって述べられていることは、Bulwer の方での Domestic school への歩み寄りを計算に入れても、やはり Thackeray の側での心境の変化を示すものと言ってよいだろう。

次の *My Novel, or Varieties in English Life* は、その副題の示すとおり、実に多くの人物が登場する、多様にして広濶、二千ページに及ぶ長大作である。話は Hazeldean という村から始まる。村人の *in loco parentis* の保護者をもって自ら任じている地主 Hazeldean は、ある日広場の片隅に、今はもう使われることなく朽ちかけている晒し台 (stock) を見つけ、妙な気まぐれから、これを新しく修復する。stock を新しく作り直したからには、それにかけて晒し者にする罪人がどうしても必要になってくる。かくして妙な廻り合わせで、ふだんから地主も目をかけている村の秀才少年にそのお鉢が廻ってくる羽目になる。そうすると、少年の母親である寡婦はすっかりおかんむりで、これまで受けていた地主からの保護を一切返上するといきまぐし、村人たちには、この stock は地主の庄政の象徴と受け取られ、村は一揆も起こりかねないありさまとなる。村民の要求に応じて stock を撤去するのは、庄屋としての面目が許さぬ一方、また日頃の温情地主の自負も大事で、地主 Hazeldean は大いに苦慮するが、村の牧師の情理を尽くした説教の効果で、村人の憤激も収まり、この空騒ぎも無事に收拾される。こういった mock-heroic めいたユーモラスな話の続く冒頭四分の一ばかりのところでは、この作品はまことに Thackeray の評言どおり、‘very dexterously brewed and bottled small beer’ と賞讃してよいだろう。ところがそれ以後では、イタリア人の愛国者亡命貴族、詩の才と新式機械発明の技術を兼ね備えた天才青年、出世欲の権化で、人情の潤いも知らぬ若

(35) cf. Ray ; p. 393

者など、極彩色の人物が續々登場し、財産争奪、恋にからむ友情の裏切り、陰謀、誘拐など、派手な事件が錯綜して、話は蜿々と続くのである。だからこの小説においても、Bulwer は最初俯角的な視点からする写実小説を心掛け、それにならり成功しながらも、ついついの間にか昔の Sensation novel に逆戻りしてしまった、と結論せざるを得ない。Bulwer はこの作品の作者を前作 *The Caxtons* の主人公 Pisistratus Caxton とするという体裁を取り、各巻の冒頭に initial chapter と称する一章を設け、そこで *The Caxtons* の主要人物に Pisistratus の筆になる *My Novel* を合評させているが、この技巧は読者と作中人物との間に心理的な距離を生じさせて、俯角派小説に必要な detachment を生み出すことにかけてたいへん効果的であった。Thackeray も *The Newcomes* を着想したとき、前々作 *Pendennis* の主人公 Arthur をこの作品の作者たらしめており、Thackeray 自身、このアイディアは Bulwer から借用したものだと言明しているほどである。⁽³⁶⁾しかし Bulwer の場合、この小説を書き続けて行くうちに、当初の detachment はどこかへけし飛んで、話は巻を追うごとに熱っぽくなり、initial chapter の果たす役割もだんだんと稀薄になっている。最初読者と作中人物のうちに保たれていた心理的距離は、いつしかなくなり、読者は作中人物との密着を強要され、不自然に過熱した雰囲気の中に押し込められてしまうのである。

このような点からして、*My Novel* は Bulwer の新たな出発の試みとして、少なくともその最初の部分において、相当の収穫を上げたとは言えるものの、全体として見た場合、決して上述の Thackeray の賞讃が完全に当てはまる作品とは思われない。だから *The Caxtons* の場合と同様、この賞讃の言葉にも、Bulwer に対する Thackeray の心境の変化が読み取れるとするのが正しい考え方と言うべきだろう。Bulwer が sensationalism を捨てて Thackeray の流派に近づく姿勢を示したのもさることながら、Thackeray の方でも Bulwer の秀れた点だけを賞めて、その短所には目をつぶる雅量というか余裕ができてきたのである。駈け出しの時代の Thackeray にこそ、Bulwer を仮想敵として想定し、これと戦うことによって自らの文学的装備を整える必要があったのだが、一流作家の地位を確保した今では、もうその必要もなくなったのである。

かくして Bulwer に対する Thackeray の戦いは終わった。この経過を考えると、Thackeray の批評は Bulwer に対する妬みのみに発し、彼を引きずり落とすことを目的としたものだったという解釈は、あまりにも coarse なものと言えるだろう。その半面、Thackeray の Bulwer 批評は全く没利害的で、気に入らぬものを峻拒する天才の潔癖さから生じたものであり、Thackeray の天才が充足される途中の止むを得ざる一過程だったのだという解釈も、romantic にすぎるだろう。Bulwer に対する Thackeray の振舞は、たしかに少しえげつなかった。しかし Thackeray はそのえげつなさに対して充分の責任を取ったのであり、それを帳消しにしてまだ余りあるほどの立派な業績をあげたのである。そしてまた自分の行動を後悔

(36) *Letters* ; vol. III, p. 298

するなど、いわゆる天才の非人間的なところと違った、親しみのもてる人柄が如実に表わされていると言ってよいだろう。Bulwer の作品は、人生についての深い洞察を示したり、深刻な問題を提起するところが全然ないものであるから、それ自体の価値からしても自然に忘れ去られるのが当然であったろうが、Thackeray からの批判によって永久に名を止どめることになったのは、Bulwer としては不幸（あるいは幸運）なことであったと言えるだろう。

Thackeray と Bulwer の関係を検討するにあたって、この小論は批評をめぐる人間関係という脇道に脱線した嫌いがあるが、この二人の関係は、文学史の見地からしても含蓄の深いものがある。Victoria 朝初期の小説界においては、一方に Dickens を旗頭として、Disraeli や Kingsley, Reade など、理想主義的、煽情主義的な情動喚起と行動の文学を首唱する一派が存在し、これに対抗して、やがて Trollope や George Eliot が写実主義的、主知主義的な観照と理解の文学を唱えて登場するのであるが、Thackeray はこの後者の一派の先駆者と考えることができる。Bulwer は作風において前者に属していたのだけれど、その気質においては後者に近いものをも持っていた。そして Bulwer のこの二元性は統一止揚されるどころか、逆にその相反する原理が相剋し、一方が他方の効果を互いに減殺し合うという分裂状態にあったのである。だから理想主義的な情動の文学の一派の牙城に迫ろうとする Thackeray にとっては、Bulwer はその一派のうちでもっとも vulnerable な、好個の攻撃目標だったと言えるだろう。この意味において、Thackeray と Bulwer の関係と、*Pelham* から *The Caxtons*, *My Novel* に至るまでの Bulwer の作風の変遷は、いわば1830~50年の間のイギリス小説史の消長の一コマを示すものと言えるのである。